

戯れの言葉

——メルヴィルの「独身男達の天国と

乙女達の地獄」について——

中村 絃 一

メルヴィルは『モービー・ディック』（一八五二）や『ピエール』（一八五二）の長篇で不評を被った後は短篇を書き始め、一八五三年から一八五六年までのわずか四年間に十六篇の作品を発表した。R・B・ビクリーによれば、メルヴィルが短篇を書くようになったきっかけとは当時創刊されたばかりの『パトナム』誌から執筆の依頼を受けて、短篇で原稿料を稼ぐのも悪くないと考えたからであるという。

これら十六篇の中には「バートルビ」、「ベニト・セリーノ」などの周知の傑作も含まれるが、ここではそれらに及ばないにしてもある意味でメルヴィルの短篇の一つの典型とも言える「独身男達の天国と乙女達の地獄」"The Paradise of Bachelors and the Tartarus of Maids"（一八五五）をとりあげ、メルヴィルが短篇執筆を始めた、先に述べたような外的なきっかけとは別に、その内的な動機、つまり、彼の文学における必然性といったものを考えてみたい。

(一)

今ここで、「独身男達の天国と乙女達の地獄」がメルヴィルの短篇の一つの典型と述べたのは、この短篇がいわゆる diptych (二枚折り聖画像) と呼ばれる特徴を持つ作品で、メルヴィルはこのように呼ばれる作品としては他にも「二つの寺院」"The Two Temples"、"貧者のプディングと富者のパンくず" "Poor Man's Pudding and Rich Man's Crumbs" を書いてゐるからである。

Diptych と呼ばれる理由は、例えば「独身男達の天国と乙女達の地獄」の場合、この作品が上のようなタイトルが付されているにもかかわらず、あるいはそのタイトルを見れば判るように、「独身男達の天国」と「乙女達の地獄」というそれぞれ独立したかのように見える二つの部分から成り立っているからである。そして、また、それぞれは独身男達と乙女達、天国と地獄といった対照的な内容を持ち、かつ二つの部分の形式は酷似し、同じ語り手によって語られる物語でもあるがゆえにこの作品がそのように呼ばれるのである。

「独身男達の天国」も「乙女達の地獄」も共に「わたし」というアメリカ人(職業は種屋)によって語られてゐると思えてよい。もっとも、「独身男達の天国」では、「わたし」にまさしくそのタイトルが言うような経験をさせてくれたのは R・F・C・というイニシャルを持つ人物のおかげであることが本文中に言及されていて、この R・F・C・とは Robert Francis Cook といい、メルヴィルのロンドンの友人の一人であったという伝記的事実が知られている。そのことから「わたし」とは作者メルヴィルであると規定する解釈をとることができないわけではない。しかし、一方、「乙女達の地獄」では「わたし」は種屋であると語り手は記していて、この場合、メルヴィルが種屋であったような伝記的事実はない。したがって、もし伝記的な解釈に立つならば「独身男

達の天国」と「乙女達の地獄」の語り手はそれぞれ異なる人物ということになろう。しかし、伝記的なものから離れ、作品を一つの独立したものと見る観点からすると、やはりこの解釈は無理なのである。なぜならば、後の物語で「乙女達の地獄」をまのあたりに目撃した語り手が「これこそまさに〈独身男達の天国〉と対をなすものだ^③」と自らに語り、さらにその地獄を抜け出した後で「ああ！〈独身男達の天国〉、ああ、〈乙女達の地獄〉^④と対にして叫ぶことから判断して、この語り手は天国、地獄を共に経験した同一人物でなくてはならないからだ。となると、独身男達の天国を経験した「わたし」もアメリカ人の種屋で、R・F・C・という人物はその友人（どんな名前のイニシャルかはあくまで不明）とされるべき人物ということでなければならぬ。

「独身男達の天国」の書き出しの文は「それはテンブル・バーから程遠くないところにある」となっていて、その後にはそこへ到達するための道筋の記述が続く。同様にして、「乙女達の地獄」の書き出しも「それはニューヨークランド、ウイドローマウンティンから程遠くないところにある」となっており、そこへ到達する道筋の記述がやはり後に来る。一方、天国にたとえられる「アパートは天に向かって十分高い所にある」^⑤と述べられるのに対し、地獄たる紙工場は「悪魔の地下牢」と呼ばれるくぼ地、つまり低い所にあるのだ。このようにして、天国たる建物と地獄たる建物が所在する場所の記述の仕方が全く相似し、同時に、天国と地獄であるから当然のこととしてもこの二つは上下に対応した位置に置かれているといった構成をこの作品は持っていることになる。

(二)

ところで、語り手の「わたし」はいったい何をもって「独身男達の天国」と呼んだのか。これはアメリカ人の「わたし」がロンドンに旅して、ある宵テンブル（ロンドンの聖堂騎士団の殿堂跡でそこに法学院がある）で飲

待を受けて過した時の経験をいう。その「ディナーに集まったのは九人の紳士ですべて独身男達だった」という。そして、そのディナーの開かれた部屋は階上高い所にあり、その構造、家具の調度品が見事で、料理と酒は素晴らしいものであった。また、招かれた紳士達はその席で何と愉快的話を語り合ったことか。

それは佳き暮し、佳き酒、佳き友情、佳き談話に静かに熱中することのまさしく極致であった。われわれは兄弟同士の一团であった。楽しみ——友愛と家庭的な楽しみがその夜の特徴となった。また、はっきりと判るのは、これら気楽な心持の人達にはわずらわしい思いをしなければならぬ妻子がいなかったことだ。その大抵の者達が旅人でもあったのだ。それというのも独身者だけが自由な旅を楽しむことができ、一家団欒の機会をないがしろにすることについて何ら良心の痛みを感じないで済むからだ。

苦痛と呼ばれるもの、面倒と名付けられる化物——これら二つの伝説はかれら独身男達の想像力には馬鹿げたものに映るかのようだった。^⑦

ディナーが終った後、最後に交された会話こそ全てを物語っている。

「さて」と、微笑をたたえた主人は言った。「このテンプル、そしてこの中でわれわれ独身男達が過しているような生活をどうお考えですか」

「ご主人」と、わたしは全く感心して率直に叫んだ。——「ご主人、これこそまさに独身男達の天国です」^⑧

一方、種屋として種袋用の用紙をニューヨークの紙工場へ購入に出掛けた「わたし」はそこにどんな地獄を見たのか。まず、その紙工場のある場所が山中の低いくぼ地で一面雪の中。その工場の名が「デグリス・マンジヨン悪魔の地下牢

「……われわれのこの工場では結婚した女性を雇うつもりはありません。彼女達は仕事をしたりやめたりしてあまりにも不規則になりがちなのです。われわれは堅実な労働者以外はお免こうむるのです。一日十二時間、毎日連続して三百六十五日、休日は日曜、感謝祭、断食日のみなのです。それがわれわれの規則です。したがって結婚した女性を雇わない以上、ここにゐる女性達はまさしく乙女達と呼ばれてしかるべきなのです」^⑩

また、工場主の話によれば、
ぼろで一杯の空漠とした生活が営まれ、肺病を引き起しそうな部屋を通つて、これら青白き娘達は死に到るのだ。^⑪

「……われわれのこの工場では結婚した女性を雇うつもりはありません。彼女達は仕事をしたりやめたりしてあまりにも不規則になりがちなのです。われわれは堅実な労働者以外はお免こうむるのです。一日十二時間、毎日連続して三百六十五日、休日は日曜、感謝祭、断食日のみなのです。それがわれわれの規則です。したがって結婚した女性を雇わない以上、ここにゐる女性達はまさしく乙女達と呼ばれてしかるべきなのです」^⑩

ということになるが、これが「乙女達の」と呼ばれるゆえんである。その彼女達がまるで機械とパルプの奴隷となつて働いている様子を語り手は次のように描写する。

わたしの眼の前を——そう、そこを回転するシリンドーにそつてゆっくりとした歩みで、パルプの蒼白な端に貼りつけられ（と、わたしには見えたように思うのだが）、陰鬱なその日にわたしが眼にした蒼白なす

べての乙女達のいつそう蒼白な顔が通りすぎて行つたのだ。のろのろと、嘆き悲しみながら、嘆願するように、だがさからうことはなく彼女達の身体は白く光りながら歩むのだったが、彼女達の苦悩は未完成の紙にかすかに映し出されて、その様子はキリストの苦悩に満ちた顔が聖ヴェロニカのハンカチに染められたかのようだった。^⑩

(三)

以上が語り手の見た「乙女達の地獄」であるが、この地獄のようなありさまの描写には幾つかの事がらに対する語り手の批判的な態度を読み取ることができよう。

例えば、先に引用した過酷な労働状態については十九世紀後半におけるアメリカの企業に見られたであろう労働条件に対して語り手は批判的な眼を向けているのだと考えることができる。休みのない十二時間労働、肺病を引き起すような埃っぽい仕事場、それに寒さ。つまり、まさしくアメリカ版「女工哀史」とでも言うべきものに對する批判である。

また、紙工場の機械とそれに就いて働く乙女達との関係を描く次の文章には機械文明そのものに對する語り手の一つの態度が隠されているといえよう。

一声たりとも言葉が発せられることはなかった。聞えるものは鉄製動物の低い途切れることのない威圧するようなブーンという音だけであった。人間の声はその場から一掃されていたのである。機械——人類のあの誇り高き奴隷——は、人間から召使いのように奉仕をうけてここに置かれているのだった。奴隷がサルタ

ン王に仕えるように、人間が機械にペコペコと黙って仕えていた。娘達は大きな機械に付属する歯車というよりも単なる歯車の歯のように見えた。¹²

あるいは、

（ぼろを裁断する大鎌は）娘達自身に死を与える道具であった。——自分達を殺すまさにその刃に娘達は砥石をあてているのだ——と、わたしは黙りこんで思った。¹³

これらはチャップリンの『モダンタイムズ』の場面を思わせるような文章である。

したがって、この機械文明に対する恐怖を敏感に感じとり、アメリカの機械文明の持つ意味に鋭く反応した作家として、M・フィッシャーがメルヴィル、ソーロー、アダムズの系譜をたどっていることも十分うなずけることである。もっとも、彼が「メルヴィルにとって機械との遭遇は人類の終焉を予期するように思われた」¹⁴とまで言っているのは極端にすぎよう。その理由については後に触れることにする。

また、「天国」がイギリスに「地獄」がニュージーランドにあるとされていることから、そのことがイギリス文明とアメリカ文明の比較となり、語り手は後者に対しては批判的な態度をとっていると思わせるような文章もある。

（独身男達の饗宴が催される部屋の）家具は古めかしくこじんまりとして見事に慎しみ深いものであった。この静かな部屋では、新しくピカピカの、そして、なま乾きのニスのためにねばねばのマホガニーテーブルとか、不愉快なほどぜいたくな長椅子^{オットマン}とか、立派すぎてとても坐れるものでないソファとかがいらいらした

気分させるといったようなことはなかった。ピカピカしたものやケバケバしいもの、安ピカのものや見かけ倒しのものが家庭的な安楽には不可欠なものでないことは分別のあるアメリカ人なら誰でも分別あるすべてのイギリス人から学ぶべき事からである。¹⁵

つまり、ここでは家具を二つの文明の象徴と読ませてアメリカ文明の批判をしているというわけである。

同じように、M・フィッシャーは「乙女達の地獄」の次のような個所にも寓意があると解釈する。語り手の「わたし」は紙工場の監督で唯一の少年キューピッドに向かって質問する。

「ここでは白い紙しか製造しないのかね、印刷は何もしないように思うのだが？ 全部白い紙ばかりなのかね？」

「もちろんです。紙工場が他に何を製造するというのですか」

若者はまるで常識を疑うかのような目つきでわたしを見つめたのだった。¹⁶

M・フィッシャーによれば、この個所では「語り手は自らの質問でアメリカという国を告発するところまで比喩を拡大している」ということになる。言い換えれば、「新世界のこの地で……語り手は……ロックの比喩——つまり、何の印もついてない紙という比喩を使い、それでもって、文化的かつ知的な不毛性——すなわち、固有の観念の不在を言わんとしているのだ。紙工場は発展するアメリカの小宇宙、つまりは世界の工場ということになるが、メルヴィルはその製品や過程に誇らしい気持を持ってないでいるのだ¹⁷」ということになる。フィッシャーはさらにここに脚注を付して、「これはヘンリ・ジュイムズが、ホーソーン『アメリカのノート』に見られる

アメリカのイメージは極端な不毛性——つまり、奇妙な白さに特徴づけられていると言った時に意味したところのものに近い」とまでいう。すなわち、例の「ないないずくしのアメリカ」というわけだ。なるほどそんなふうに読めないこともない。

そして、このように読んでくると、「独身男達の天国と乙女達の地獄」は相当深刻な寓意を秘めた物語ということになる。そういう意味では、メルヴィルの短篇の最近の研究者達、R・B・ビックリー、M・フィッシャー、W・B・ディリングハム^⑧がそれぞれ主張するように、メルヴィルは strategy を弄する作家であり、the Great Art of Telling the Truth を会得した作家であり、the fine art of concealment を身につけた作家ということになり、先に述べてきたような、この短篇の持つ寓意を重要視することは当を得ているのかも知れない。

(四)

しかしながら、これらの寓意をせっかく見つけ出し、しかもその意味自体は深刻そうに思われるわりには、それがそれほどにわれわれの胸を打ってこないのはどういうわけなのか。資本主義企業下における女子労働者酷使に対する批判、アメリカ文明告発といったメッセージがこの短篇を讀んでいて終始意識されるということはないのだ。そういった寓意にはどこかしら首尾一貫性が欠けているように思われるのである。時にはそういった寓意は相当無理をして見つけ出してきたものとしてしか感じられないでもない。どうしてなのか。

それは一つには、この作品では言葉の遊びといった要素が盛んに目につくからである。例えば、先の家具を比喻に用いてのアメリカ文明批判の文章のすぐ後に、語り手が次のように続ける語り口はどんなものか。

The American Benedick snatches, down-town, a tough chop in a gilded show-box; the English bachelor leisurely dines at home on that incomparable South Down of his, off a plain deal board. ②

この文では、言葉^{ことば}を対^{たい}にして使った方法は見事なものである。the American Benedick (既婚のアメリカ人) → the English bachelor | snatches ← leisurely dines | down-town → at home | a tough chop (厚切りの牛肉片) → that incomparable South Down (サウスダウン種羊肉) | a gilded show-box ← a plain deal board. これはどう考えてみても、深刻な文明批判というよりは、それにかこつけて、出来る限り技巧を弄した言葉の遊びといった要素の方がはるかに強い文であろう。だから、安ビカのアメリカ文明をまじめに批判しているかと思われる文章のすぐ後に、このような文がくると一種のアンチ・クライマックスを感じないわけには行かないし、そうなると直前の文章のもつまじめさの程度もそれほどではないのかと思ひ直す。言い換えれば、語り手はここでは深刻そうな装いのもとに実は二つの文明の対比を楽しんで語っているにすぎないと感じることになる。すごいというのに語弊があるとするならば、その楽しみこそが語り手の真面目^{まじめ}ではないかと思われるのだ。

同様にして、「女工哀史」中の女工同様に働く乙女達の描写にしてもそれはその悲惨さをまじめに描くというよりも語り手はどこかしら言葉を楽しんでいるのではないかと思われる所が目につくのである。

At rows of blank-looking counters sat rows of blank-looking girls, with blank, white folders in their blank hands, all blankly folding blank paper. ③ (七線筆音)

この文での blank (blankly) という言葉を何遍も重ねる使い方は、もちろん、その言葉によって表わされる状

況を強調してのことだと考えられなくもないが、半面、語り手はこういう技巧を弄して楽しんでいるのだと感じられてくるのはいかんとも仕難い。

このことは前に引用したことのある次のような文の pallid という言葉の使い方についても言えよう。

Before my eyes——there, passing in slow procession along the wheeling cylinders, I assumed to see, glued to the pallid incipience of the pulp, the yet more pallid faces of all the pallid girls I had eyed that heavy day. (下線筆者)

さらに、紙工場が白い紙しか製造しないことから、M・フィッシャーがジョン・ロックの比喻を持ち出してきてアメリカ文明の不毛性を読みとろうとしているのも寓意にとらわれすぎているように思われる。語り手がジョン・ロックの比喻に言及している個所は次のようになっていくにすぎない。その前に語り手は白い紙が次から次へと製造されるありさまを見て、その紙が一体どんなものを使用されるのだろうかと考えてみる——説教、訴訟文書、処方箋、ラブレター、結婚証明書……等々と。そして、

その時、これらの白い紙がここに積み重ねられて行くのを再び眼にしてわたしはジョン・ロックのあの有名な比喻を思わないではおれなかった。彼は人間には生得的観念はないという自説を証明するために生れたばかりの人間の心を白い紙にたとえ、何かがその上に書かれることにはなるだろうがどんな性格になるかは判ったものでないと言ったのだ。

ここで語り手がジョン・ロックを持ち出してきているのは何も白い紙によってアメリカ文明の不毛性をうんぬ

んするためではなからう。語り手は白い紙からジョン・ロックの比喩を思いついたことだけをただ得意になって語っているにすぎないと考える方が自然に思われるのである。

幾人かの研究者が指摘するように、この「乙女達の地獄」の文章にはセクシャル・イメージャリーが見られるのだが、これについてもそれを生み出しているのは語り手の言葉の遊びといった要素が大きいと言えよう。冒頭の「薄暗い岩山が次第に迫り……二つに引き裂かれた凄惨な形相の岩壁のあいだを荒々しいメキシコ湾流からの風が絶えまなく吹きぬけているために〈狂女のふいご管〉と呼ばれる山道」とか、「その黒檀を思わせる異様な黒さ、そして不意に収縮する岩峽のために〈黒峽谷〉と呼ばれる地点」とか、「異様な色をした〈血の河〉と呼ばれる奔流」などといったイメージは女性の性器官を思わせるものだという。R・B・ビックリーによれば、メルヴィルは、そのことに気づくかどうか読者の感受性を試しているのだということになる。そして、そこには確かにそういう遊びの要素があると考えられるのだ。このようなイメージを持つ地形を進んで行くのが「種屋」であり、さらにこの紙工場で白いどろどろのバルブが紙の製品となって、かつては看護婦であった乙女の手に生れ出てくるのに要する時間が「九分間」であるという。また、それを缺でプチンと裁断する時の音は臍の緒を切る音に確かに類似する。語り手はこういうイメージを秘かに駆使して露骨にはできぬ性、生殖を描いて見せているのである。ただし、それを描いて何かをしようというのではない。それは、ただ現代のようにあけすけに描けぬ事からゆえに秘かに描く、ただそれだけの楽しみと言えよう。

こういう楽しみ、遊びの心は「独身男達の天国」にも現れている。ここでは事がらは性、生殖とは違って大いにあけつぽろげに出来るイメージが駆使される。それは戦争部隊のイメージである。しかし、料理と戦争との連想とはこれまた何と奇異な取り合せであろうか。

(この時点でわれわれは一杯のシェリー酒を飲んでさわやかな気分になった。) これら軽装の散兵が退散した後、あの有名な英国の大元帥、ロースト・ビーフに率いられて饗宴の重砲兵が入場してきた。幕僚にはマトンのくら肉、肥った七面鳥、チキン・パイ、その他の美味を果しなく従えていた。その間、前衛隊として九杯の銀のジョッキに泡立つビールがやってきた。この重兵器類が軽装の散兵の後をたどって退散すると、狩猟鳥の精鋭隊がキャンプを張った。そのキャンプ・ファイアはぶどう酒の真赤な壘によって点火された。

語り手はここで料理と戦争部隊という連想の突飛な思いつきに興奮し嬉々として比喻を続けているかのように思われる。突飛であるがゆえに独創的な連想——これに酔ったかのように語り続ける。これは何か深刻な寓意などを秘めるのでなく料理の豪華さ、楽しさをひたすら伝えようとする語り手の意図のあらわれなのだ。語り手の楽しみ、遊びの精神が横溢してこういう比喻を連ねさせたのだと言えよう。

(五)

一つの文を全く対になった言葉を使って書く技巧、一つの文の中に同じ言葉(例えば、blank, pallid)をくり返し用いる方法、露骨には描けぬもの(性、生殖)を秘かに描いて見せること、突飛な、あるいはほればれするような連想(白い紙とジョン・ロックの白紙説、料理と戦争部隊)に嬉々として言葉をつなぐこと——こうした技巧や言葉の遊びが、一見深刻そうに見えるこの作品の寓意、メッセージを圧してその力を弱めているというのが、今まで論じてきた趣旨である。したがって、深刻そうな寓意やメッセージを無理にとりあげて重要視するこ

とは今まで述べてきたような語り手の遊び精神を著しく損うものと考えなのだ。

さらに、語り手のこの精神はもっと大きな枠組においても面目躍如として現れている。

先に述べたように、「独身男達の天国」の文章は料理と戦争という連想に満ちている。それもそのはずで、そこに集まって饗宴に加わっている九人の紳士達は聖堂騎士^{テンブラー}と呼ばれる人達なのである。つまり、この人達は戦いと結びつけられているはずの人達である。しかし、現在では実は「純粹の聖堂騎士はずっと前に消滅したのだ」^②、「大洪水以前の歳月のように豪気の聖堂騎士はもはや存在しない。ただ名前だけが残っているだけだ」^③ということになってしまっている。そして、次のような文章は何とも皮肉な調子となる。

しかし、誇り高き名誉の高みから墜落した多くの他のものように——枝にある時は固く地に落ちた時には熟しているりんごのように——墜落した聖堂騎士はそれだけです見事な人物になるのだ。^④

しかし、現代の聖堂騎士とはもっとも立派な仲間、もっとも愛想のよい主人役、つまり饗宴の客なのだ。^⑤

つまり、敵を切って「名誉を刻む聖堂騎士^{テンブラー}」ではなくてナイフでロースト・ビーフを切って饗宴を楽しむ聖堂騎士^{テラ}が独身男達の天国を構成しているというわけである。

「乙女達の地獄」の場合にも、すでに見てきたように性、生殖のイメージが秘かに隠され、また種屋^{シードマン}が乙女達の働く紙工場に訪れるにもかかわらず、彼女達は未婚者であらねばならぬというアイロニーがある。語り手は工場主に向かって尋ねる。

「どうしてなんです、大抵の工場では女性の工員は年齢が幾つであっても一様に娘と^{ガール}呼ばれて決して女^{ウーマン}

と呼ばれないのです」

「ああ、その点は、きつと、思うに彼女達は総じて結婚していないという事実からでしょう。——それが理由だと思えます……」^②

「乙女達の地獄」では生きた人間の生殖が行われるということがなく、生産されるのは白い紙ばかりなのである。

しかし、語り手が伝えるこのアイロニーをあまり深刻に受けとめることはやはり考えものである。なるほど、「乙女達の地獄」だけをとりあげればそのアイロニーは相当深刻であるが、しかし、やはりそれは「独身男達の天国」とのつりあいの上で考えらるべきことで、こちらに見られる語り手の言葉づかいの軽快さ、遊び、楽しみの心を無視してはならないのだ。

となると、問題は結局のところ、この「独身男達の天国と乙女達の地獄」が *dytich* と呼ばれる作品であることに帰着することになる。すなわち「独身男達の天国」と「乙女達の地獄」はそれぞれ独立して読まれるものではなく、あくまで二つは一緒にして読まれるべきものだというのである。後者から伝わるメッセージばかりを強調しては二枚折りの構成は壊れてしまう。二つ併せて読んで始めて、この作品には寓意やメッセージが秘められていることは確かであってもそれを主として伝えることに語り手の意図があるのではないことに気がつくはずである。その時には、語り手は言葉、イメージ、連想、アイロニーなどの技巧を駆使して一つの遊びをしているという読み方をする方が自然であるということになる。そして、こういう語り手の遊びこそは『モービィ・デイック』、『ピエール』を書いた後のメルヴィルには、なお書き続けるための言わば生理作用として、必要欠くべからざるものではなかっただろうか。

自分の持つ精神の全エネルギーを傾けるというのではなく、言葉に戯れ、連想を楽しみ、アイロニーを効かす、そういうことに喜びを見出した作品が「独身男達の天国と乙女達の地獄」であると言える。そういう意味では、これは一種のお伽話であって、お伽話からはメッセージをあまり深刻に引き出すものではなからう。

注

- ① Cf. R. Bruce Bickley, Jr., *The Method of Melville's Short Fiction* (Duke University Press, 1975), p. 26.
- ② Jay Leyda, *メルクハム・メルクハム*° Cf. Jay Leyda, ed., *The Complete Stories of Herman Melville* (New York: Random, 1949), p. xx.
- ③ *Selected Writings of Herman Melville* (Modern Library, 1952), pp. 199-200.
- ④ *Ibid.*, p. 211.
- ⑤ *Ibid.*, p. 190.
- ⑥ *Ibid.*, p. 189.
- ⑦ *Ibid.*, p. 193.
- ⑧ *Ibid.*, p. 195.
- ⑨ *Ibid.*, p. 205.
- ⑩ *Ibid.*, p. 210.
- ⑪ *Ibid.*, p. 209.
- ⑫ *Ibid.*, p. 202.
- ⑬ *Ibid.*, p. 205.
- ⑭ Marvin Fisher, *Going Under, Melville's Short Fiction and the American 1850s* (Louisiana State University Press, 1977), p. 89.
- ⑮ *Selected Writings of Herman Melville*, p. 190.
- ⑯ *Ibid.*, p. 203.

- ① Marvin Fisher, *op. cit.*, p. 88.
- ② Cf. William B. Dillingham, *Melville's Short Fiction 1853-1856*. (The University of Georgia Press, 1977).
- ③ *Selected Writings of Herman Melville*, p. 190.
- ④ *Ibid.*, p. 201.
- ⑤ *Ibid.*, p. 209.
- ⑥ *Ibid.*, p. 208.
- ⑦ *Ibid.*, p. 191.
- ⑧⑨ *Ibid.*, pp. 186-7.
- ⑩⑪ *Ibid.*, p. 187.
- ⑫ *Ibid.*, p. 210.